

純血華劇派 JUNKETSU TERRO RHYTHM

第10回ミュージカル公演

『奇跡のダンデライオン』

～再び路上で～



作・演出

春田鮎

純血華劇派 第10回ミュージカル公演

『奇跡のダンデライオン ～再び路上で～』

作・演出 春田鮎

2018年5月24日～27日 G e k i 地下L i b e r t y

《登場人物》

サニー…ダンデライオンの人気者 / 山田静玲香
タップ…ダンデライオンのリーダー / 福井紗季
ナナ…ダンデライオンのマドンナ / 鹿島梨央
スピ…ダンデライオン唯一の男の子 / 吉崎華湖女
オードリー…夢見がちな足の不自由な少女 / M A O
ベイブ…ダンデライオンの末っ子 甘えん坊 / 妹尾寛華
ローラ婦人…ダンデライオンのファンのご婦人 元プリマ / 松山莉央
ハンニバル…ショークラブ “エデン” のプロデューサー / 山口万里奈
ストーン…エデンの振付師 / 片又咲季
デニス…エデンのマネージャー / 梁川彩夏
クラウン…新聞記者 芸術覧を担当 / 大塚乃慧
ニキータ…エデンのトップタレント 自信家 / 阿久津千尋
ランバダ…エデンのタレント ニキータの取り巻き / 舞桜
ネイル…エデンのタレント 一見、ワガママ / 蜂谷朱理
テッド…エデンの男性タレント 気取り屋 / 荒川紗生
ミッキー…エデンのタレント サニーを受け入れる / 石関菜月
エバ…見習いのダンサー 優しい / 丸岡菜緒
クロック…エデンのドアボーイ サニーの味方 / 緒形まひる

◆STEP 1

タップ（モノローグ）「私たちの町は、高い塀によって分断されている。塀の向こうとこちら側は憎しみ合い、長い間戦争を続けてきた。けどもうずいぶん長い間、大きな戦闘は息をひそめ、市民は生活を取り戻し穏やかな日々が続いている。戦争によって親を失い、家を失った私たちは、いつの間にか肩を寄せ合うようにして、この路上で暮らし始めた。踊ることが大好きな私たちは、ダンデライオンという名前を付けて、路上でダンスを見せてお金をかせぐ。今日のパンと、明日の夢を手にするために」

オープニングM 『わが美しき日々よ』 ローラ婦人の歌

路上で暮らす様子のダンデライオン。

サニーとナナはステップの練習をしている。

タップとベイブは料理をしている。

スピんとオードリーは歩行練習をしている。

スピン「ほら、もう少し！そう、ゆっくり、ゆっくり」

オードリー「ゆっくり、ゆっくり・・・あ！（倒れる）」

スピン「大丈夫かい、オードリー！・・・ああ、びっくりした」

オードリー「無理よ、歩けない！練習なんかしても無駄よ」

スピン「簡単にあきらめちゃ駄目だよ。さ、もう一度」

オードリー「いや！はなして！」

スピン「オードリー・・・」

ローラ「スピン、そんなに焦っては駄目よ」

スピン「ローラ婦人・・・」

ローラ「ねえ、オードリー歌を歌ってみない？」

オードリー「・・・歌？」

ローラ「そう、歌よ。以前からあなたの声を素敵だなんて思っていたの。歌は素晴らしいわよ。私は歌が下手だから叶わなかったけれど、一度でいいから思いっきりステージで歌って見たかったわ」

スピン「歌っておくれよ、オードリー。僕、聞いてみたい」

ローラ「私も」

オードリー「スピン・・・ローラ婦人・・・」

歌い出すオードリー。

みんなも一緒に歌い出す。

少しづつ人が集まってくる。(モブ)

ローラ「まあ、いつの間にかこんなに大勢の人たちが。みんなチャンスよ」

タツプ「みなさん、こんにちは！どうか私たち、ダンデライオンのダンスを見ていってください！」

みんな「宜しくお願いします！」

観客、拍手。

新聞記者のクラウンが写真を撮り始める。

M 『奇跡のダンデライオン』

お金を集めるオードリー。

暗転

◆STEP 2

高級ショークラブ“エデン”。

リハーサル中。

D 『エデン』

ストーン「OK。いいわ。休憩にして」

ハンニバル「撮れたか？」

クラウン「はい、もうばっちり！しかしいつ見ても、ニキータは美しいですね」

デニス「当たり前でしょう。わがエデンのトップダンサーですよ」

ハンニバル「しっかり宣伝してくれよ。お前の新聞社に払ってる広告費は安くない」

クラウン「そりやもちろんわかってます」

ハンニバル「ではこの記事はなんだ？」

クラウン「あ、これは・・・実は路上でダンスショーをやっているダンデライオンっていうチームがありましてね。このところずいぶん評判で、ファンもいるようです。特にサニ―っていう子がなかなか素晴らしいんですよ！あ、もちろん、ニキータにはまったく及びませんがね」

ハンニバル「どこの店の専属なんだ？」

クラウン「いえ、彼女たちは戦争孤児です。どこにも世話にならずに、自分たちだけで路上で暮らしてるんです。まあ、それが記事のネタにもうってつけだったわけですが」

ハンニバル「最近、うちの店の客が減ってるのは、そのせいじゃないだろうな」

クラウン「彼女たちに人気を奪われているって？さあ、それはなんとも・・・」

ハンニバル「どこにいる？」

クラウン「ご覧になりますか？いつでもご案内しますよ」

ストーン「さあ、そろそろ始めるわよ」

ニキータ「ちよつと待って。オーナー、お話が」

ハンニバル「なんだ？ニキータ」

ニキータ「あ・・・実はミッキーが朝から熱があつて。連日のステージと練習でみんなひどく疲れているんです。1日、いえ半日でいいので休みをいただけませんか？」

ハンニバル「駄目だ」

ニキータ「オーナー」

ハンニバル「ミッキーは今日は休め。他の者はスケジュール通りだ。次のショーまでこの曲を仕上げる。甘えは許さない。誰のおかげでステージに立てる？」

ニキータ「・・・」

ハンニバル「話しはそれだけか？」

ニキータ「・・・はい」

ハンニバル「デニス、あとは任せたぞ。おい、新聞屋、案内しろ」

クラウン「はい」

デニス「行ってらっしゃいませ」

ストーン「さ、始めましょう。時間が無いわよ」

ミッキーを部屋に連れて行くエバ。

力なくスタンバイするニキータたち。

暗転

◆STEP 3

エデンの店先。

掃除をしているクロック。

M 『僕はドアボーイ』

買い物に出かけてきたサニーが通りかかる。

サニー「なんだかずいぶん楽しそうだね？」

クロック「やあ、こんにちは！本当は掃除なんて嫌いだけど、どうせやるなら楽しまないと損だろう？」

サニー「確かに」

クロック「見かけない顔だね？この町の人？」

サニー「この町はこの町なんだけど」

クロック「家はどこ？僕はこの建物の屋上に」

サニー「家は無いんだ」

クロック「え？どうして？」

サニー「・・・どうしても・・・それじゃ」

クロック「待って！ちよつと寄って行かないかい？」

サニー「どこに？」

クロック「僕の家」

サニー「なんで？」

クロック「なんだか君、面白そうな人だから」

サニー「そうかな？」

クロック「見てごらん、一番上に小さな煙突が見えるだろう？あれが僕の家。もともとは物置だったんだけどね」

サニー「すごい建物だな」

クロック「知らないの？ここはエデンっていう有名なショークラブだよ。戦争前からつづいてる老舗なんだから」

サニー「ショークラブ？ショーを見せるの？」

クロック「ああ。お客さんの前で踊ったり歌を歌ったりするんだ」

サニー「君も踊るの？」

クロック「No, No! 僕はこの店のドアボーイさ。お客さんの案内をしたり、荷物を預かったり」

サニー「でもさつきはなかなか素敵だったよ」

クロック「やめてよ、はずかしいなあ」

サニー「アタシもこんなお店で踊ってみたいな」

クロック「君もダンスを？」

サニー「路上でだけだね。アタシ、家が無いって言ったでしょ？友達と路上で暮らしてるんだ。ときどき道行く人にダンスを見せて、少しだけお金をもらって、今日もこうやってパンを買いに・・・あ、みんながお腹すかせて待ってるんだった！」

クロック「そりゃいけない！あ、ちょっと待ってて！」

何かを取りに行くクロック。食べ物を持って戻ってくる。

クロック「そら！持って行って」

サニー「どうしたの？これ」

クロック「気にしなくていいよ。どうせたくさん捨てちゃうんだ。店の余り物で悪いんだけど（自分も食べる）・・・君たちも戦争で？」

サニー「うん・・・みんな親がいなくなっちゃって。だから」

クロック「僕もさ」

ハンニバルとクラウンが出てくる。

クロック「あ！オーナー！お出かけですか？」

ハンニバル「クラウン、遊んでないでしっかり掃除しろ。クビにするぞ」

クロック「ひえー、やりますやります！」

サニー「アタシ、もう行かないや。じゃあね」

クロック「あ！また会えるかな？」

サニー「たぶんね。バイバイ」

帰っていくサニー。

クラウン「あれ？あの子」

ハンニバル「いくぞ」

クロック「いってらっしゃいましー」

お辞儀するクロック。

暗転

◆STEP 4

みんなで新聞記事を見ているダンデライオンたち。

スピン「どうだい、僕のこのポーズ！決まってるだろ？」

オードリー「はいはい、素敵よ。まるで雨に歌えばのジーンケリーみたい」

スピン「へへん」

ベイブ「私だってまるでエルサみたいでしょ？」

スピン「エルサっていうよりオラフじゃないかな」

ベイブ「ひどい！スピンなんて知らない！」

みんな「(笑)」

戻ってきたサニー。

スピン「あ、帰って来た」

ベイブ「サニー！遅いわよ！何してたの！？私もう、おなかペコペコ」

サニー「ごめんごめん、ちよつと話し込んでちゃって」

ナナ「誰と？」

サニー「えーと、ドアボーイ」

ナナ「ドアボーイ？男の子？」

サニー「うん、そうだよ」

オードリー「カツコよかった？」

スピン「なんだよ、オードリー、気になるのかい？」

オードリー「別に」

スピン「・・・」

ナナ「町の人？」

サニー「うん、エデンっていうショークラブで働いてるんだって」

ベイブ「ドアボーイってなに？ドアを開けたり閉めたりするの？」

ナナ「それもあるけど、お客さんの案内とかするんじゃない？」

ベイブ「ふーん」

タップが来る。

タップ「サニー、頼んだものあった？」

サニー「あったあった！特大バケット、今日、特売日だったよ」

タップ「ラッキーだったね。ステラおばさん、元気だった？」

サニー「元気元気。相変わらず腰が痛いって言ってたけど。そうだ、おばさんがね、これ持っていくなさいって」

オードリー「なあに？」

スピン「わ、パンの耳だ」

ベイブ「パンの耳って、四角いパンのはじっこ切ったやつ？」

サニー「そう。いつも安い値段で売ってるんだけど、今日は余っちゃったから持っていきなさいって」

ナナ「これ油で揚げて砂糖をまぶすと、最高においしいのよ」

ベイブ「わー、作って作って！」

スピン「なんだよ、これ。ハトの餌にするやつじゃないの？馬鹿にしてら」

タップ「スピン、馬鹿にしてるのはあんたよ」

スピン「なにがさ」

タップ「たしかにハトやペットの餌にする人もいるだろうけど、これだってパン屋の職人たちが朝早くから腕によりをかけて焼いたパンさ。あんたは今、そのパンを馬鹿にしたんだよ。そんなこと、私は許さない」

スピン「・・・だけど」

サニー「タップの言うとおりだよ。ステラおばさんは別にアタシたちを馬鹿にしてパンの耳をくれたんじゃない。戦争で親をなくしたアタシたちを心配してくれたんだ」

スピン「・・・ごめん」

タップ「わかればいいよ。たしかに私たちは親もいない、家もない孤児（みなしご）だけど、恥じることもなくて何も無い。惨めな気持ちになったりしないで、胸張って生きていこう」
ナナ「そうよ。だって私たちには夢があるじゃない。ダンデライオンをすごいダンスグループにして、おっきなステージでたくさんのお客の前で、思いつき踊ってみせようって夢が」

スピン「そうだね。そうだよ。僕たちには夢があるんだ！そうだ、忘れちゃ駄目なんだ！僕らには夢がある！」

M Don, t Forget The Dream

拍手をしながらハンニバルが現れる。

クラウンもついてくる。

タップ「誰？」

クラウン「こんにちは。この間は取材させてくれてありがとう！記事もすごい評判だったよ」

タップ「あ、新聞記者さん。こちらこそ、あれからお客さんが増えて助かっています。もう少し頑張ってお金がたまったら、みんなで住む部屋を借りたいんです」

クラウン「そうかい。あ、紹介しよう。こちらは」

ハンニバル「ハンニバル・ホプキンスだ。ショーのプロデューサーの仕事をしている。素晴

らしい歌とダンスに挨拶するのも忘れてしまったよ」

ナナ「ショーのプロデュース？プロデューサーってこと？」

ハンニバル「そういう事だね。それから町でショークラブも経営している。エデンという店だが、知らないかな？」

サニー「あ！さっきの店だ」

ハンニバル「知っているのかい？」

サニー「いや、前を通りかかっただけで」

ハンニバル「そうか。ところで君たちは兄弟なのかな？」

オードリー「いいえ。私たちは、えーと・・・仲間です」

ハンニバル「仲間？友達ってことかい？」

オードリー「ううん、友達なんて軽いもんじゃなくて、一緒に生きていくための仲間。なんていうんだろう、こういうの、ねえ、スピン」

スピン「えー！？僕だっけ分らないよ。ナナ」

ナナ「そうね・・・同志？ちよつと硬いかな？」

ハンニバル「ははははは！とにかくかけがえのない関係ってことだね」

サニー「そうそう。その通り！ね？」

ハンニバル「君たちのダンスを見たのは初めてなんだが、とても素晴らしかった」

タップ「ありがとうございます」

ハンニバル「そこで、どうだろう、我がショークラブ“エデン”にスカウトしたいと思うんだが」

スピン「えー！どういう事！？」

クラウン「ハンニバルさん、いきなり大丈夫ですか？」

ハンニバル「私を誰だと思っている？少し見ればどれだけ素晴らしいかはすぐわかる」

ベイブ「スカウト？スカートとは違うの？」

ナナ「この人の店でショーに出ないかってことよ」

ベイブ「うそー！」

オードリー「すごいじゃない！これって夢への第一歩！？」

スピン「やった！オードリー、僕たちにも運が向いてきたんだ！ね？タップ！そうだよね？」

ハンニバル「ただし」

タップ「なんですか？」

ハンニバル「店に来てもらうのは、君一人だけだ」

サニー「・・・アタシ？アタシ一人？」

ハンニバル「そうだ。君の歌とダンス、そして人を引き付けるオーラは本物だ。きつとすぐにもナンバーワンの人気になるだろう。私が保証する。すでに次のショーの準備が始まっている。すぐにもリハーサルに参加してくれ。明日、迎えの者をよこそう。それま

でに荷物をまとめておいてくれ。必要なものがあれば用意しよう。何でも言ってくれ。それではまた明日」

サニー「・・・アタシ！・・・行かない」

ハンニバル「何だって？」

サニー「行かないったら行かない！」

タップ「サニー！」

サニー「だいたい何よ、アタシがいくのが当然みたいに。アタシはここにいる。あんたの店なんか、全然興味ないんだから！ベー！」

ナナ「サニー」

ハンニバル「なるほど。では、今日は帰るとしよう。だけでもう一度よく考えるんだ。ずっとこんな日の当たらない場所で踊り続けるのか、大勢の観客の前でスポットライトに照らされて拍手を浴びるのか。君の仲間を思う気持ちは分らないでもないが、ショービジネスの世界は君が考えるほど甘くはないんだ。それを肝に銘じておきたまえ」

クラウン「ハンニバルさん、あの・・・」

ハンニバル「新しいスターを手に入れて、ライバルをつぶせたら一石二鳥だ。君はサニーから目を離すな。わかったな」

去っていくハンニバル。

暗転

◆STEP 5

エデン。リハーサル中。

ストーン「だめだめだめ！何度言ったらわかるの？全然合っていないじゃない！あなたたちやる気があるの！？」

ミッキー「ごめんなさい！私が練習休んじやったから」

エバ「ミッキー、大丈夫？」

ミッキー「ありがとう、エバ」

ストーン「このままじゃオーナーに見せられないわ。あなたたちのせいで私の仕事が無くなったらどうしてくれるのよ！ミッキー！いいこと？30分あげる。30分以内に今のところを完璧にきなさい。いい？わかった？・・・わかったの！？」

ミッキー「はい！・・・(泣)」

出ていくストーン。

デニスが来る。

デニス「あら？リハーサルはどうしたんですか？ストーン先生は？」

テッド「職探しにでも行ったんじゃないですかね？」

デニス「職探し？なにを馬鹿な事を。新しい曲はどうなってるんですか？」

ランバダ「さあね？」

デニス「ニキータ？」

ニキータ「……」

ネイル「あーあ、なんであたしたちまで怒られなきゃいけないのよ」

テッド「ミツキー、泣くなよ。泣いたってステップは覚えられないぜ」

ランバダ「足手まといならさ、完全にぶっ倒れて、店もやめてくれれば問題はなくなるんだけどね」

エバ「そんな、ひどい……」

ネイル「何がひどいの？みんなの足ひばって、泣いてすむならあたしだって泣きたいわよ。あたしがひとりでどれだけ練習してると思ってるの！？」

ミツキー「ごめんなさい」

ネイル「うっとおしいのよ！その泣きっ面も甘え声も。プロならやることやってよね」

出ていくネイル。

デニス「ネイル？どこへ行くの？まだリハーサルの時間よ！ネイル！……（ため息）」

ランバダ「ほら、ミツキー。もう3分すぎた。あと27分しかないよ」

ミツキー「あ、はい」

エバ「つきあうわ」

ミツキー「ありがとう、エバ」

ステップを確認し始めるミツキーとエバ。

ニキータ「……そうじゃない。そこはこうよ」

ランバダ「ニキータ、そんな落ちこぼれほっときなよ」

ニキータ「じゃあこのままステージにあがれるの？」

ランバダ「それは……」

ニキータ「私はただ私のステージを完璧にしたいだけ。あなたはどうかの？テッド」

テッド「ん？……そりゃ、まあ……仕方ない。やるか」

ランバダ「なによ、テッドまで」

テッド「俺もこの仕事を失いたくはないからね。伝統ある一流のステージで、ギャラも破格。オーナーはきついが、苦勞に見合った見返りには満足している。つまり、それがプロフェショナルなことさ」

ニキータ「ランバダ、ネイルを連れてきて。30分で仕上げるわよ」

ランバダ「・・・わかったわ」

出ていくランバダ。

ステップを繰り返す4人。

暗転

◆STEP 6

路上。ダンデライオン。

サニー「・・・アタシ、行かないから。ずっとみんなという」

ベイブ「よかった。私、サニーが私たちを置いてあの人と行っちゃうかと思って心配しちゃった」

サニー「大丈夫だよ、ベイブ」

スピン「なんだよ、えらそうに」

ナナ「スピン？」

スピン「まるでみんなのために我慢して残ったみたいな言い方だな」

ナナ「スピン！やめなさい」

スピン「ちえっ！」

サニー「別に我慢なんかしてないよ。アタシはここにいたい。みんなと一緒に、ここで寝て、同じもの食べて、同じ夢を見て・・・ダンスだってみんなと一緒にやなきや踊れない」

スピン「じゃあこれっぽっちも未練はないんだな？エデンのステージに立てたかもしれないチャンスを手振ったんだぞ！？俺たちといなければ夢がなかったかもって、爪の先ほども考えてないんだな！？」

サニー「アタシにどうしろって言うのよ！？じゃあなに？アタシがみんなを裏切ってここから出ていけばよかったって言うの！？ええ、そうよ、アタシだって大きなステージで踊ってみたかった！だけど、それはみんなと一緒にやなきやイヤなの！みんなと叶える夢じやなきや意味がないの！どうしてわかってくれないのよ！スピンの馬鹿！」

走って行ってしまおうサニー。

ナナ「サニー！」

スピン「・・・ちくしょう！どうして！・・・どうして、みんな一緒じゃだめなんだよ・・・
どうしてダンデライオンじゃだめなんだよ！・・・ちくしょう・・・」

ローラ婦人が来る。

ローラ「どうしたの？なにかあったの？」

ナナ「ローラ婦人」

オードリー「それが・・・」

ベイブ「あのね、エデンって言うお店の人が来て、サニーをスカウトしたの」

ローラ「スカウト？」

ナナ「私たちのダンスを見て、サニーを気にいったんです。最初はダンデライオンみんな
でそのステージに立てるのかと思って喜んだんだけど、その人はサニー一人だけに、自分
の店で踊らないかって」

オードリー「ローラ婦人、わたしたち、ばらばらになっちゃうのかしら。スピンはサニー
だけ選ばれたことに腹を立てたけど、私は自分が踊ることが出来ないから、サニーだけで
も夢をかなえて欲しいなって、そう思った。でも、サニーがいなくなったら、ダンデライ
オンはどうなっちゃうだろうって思ったら、サニーの背中を押してあげられなかった。だ
って、サニーは私たちにとって、太陽だもの。いつも明るくて元気で。そんなサニーがい
なくなったらきつと」

ローラ「ねえ、オードリー。わたしが昔、バレエダンサーだったって話はしたわよね？」

オードリー「ええ。聞いたわ」

ローラ「私はね、こう見えて、バレエ劇団のプリマだったのよ」

オードリー「へえ、すごい」

ベイブ「プリマってなあに？」

ナナ「一番きれいで踊りが上手な女性の事よ」

ベイブ「ふーん」

ローラ「きれいかどうかはともかく、わたしは毎日、一所懸命踊っていたわ。バレエが私
の全てだった。私からバレエを取ったら何も残らないと思っていたわ。ところがある時か
ら、私は上手く踊ることが出来なくなってしまったの」

ベイブ「どうして？」

ローラ「ふふふ。恋をしてしまったから」

オードリー・ナナ「恋！？」

ローラ「ええ。その人も劇団のトップダンサーで、いつも私と一緒におどっていたわ。踊
りの中では、キスをしそうなほど顔を近づけたり、背中から優しく包み込むように抱きし
められたり、時には高く抱き上げられたりね」

オードリー「すてき」

ローラ「だけど、それはバレエの振付だから私は何とも思っていないかった。ドキドキすることもないし、もしかしたら彼の存在さえも意に介していなかったかも。だけど、ある時」

オードリー「ある時？」

ローラ「レッスンが終わって帰り支度も済ませ、外に出ようとしてドアを開けたら」

オードリー・ベイブ「開けたら」

ローラ「彼と鉢合わせして、おでことおでこをこっつんこ」

オードリー・ベイブ「キヤー」

ローラ「そうしたら彼ったら顔を真っ赤にして、何度も何度もごめんなさいって。さっきまであんなにくっついていたのに。彼の誠実さにわたしはすっかり彼を好きになっていたわ。それからが大変、いつものように踊ろうと思ってても意識してしまって、まるでマリオネットのように手足はバラバラ、振り付けは忘れる、ひどい有様よ」

ナナ「それでどうしたの？」

ローラ「これじゃ二人ともダンサーとして駄目になる。そう二人で話し合って・・・お別れしたわ」

ベイブ「えー、やだやだ、かなしいー」

ローラ「笑」たしかに悲しかったわ。何日も泣いた。でもね、自分の夢をかなえるためには、その時はそれが最善の選択だったと今でも信じてる」

スピン「ローラ婦人・・・サニーにとって、最善の選択ってなんだろう」

ローラ「それは私にはわからないわ。サニーが決めることよ。でもね、その人と私は15年後、ばったり再会して、結婚したの」

みんな「えー」

ローラ「それが私の最愛の旦那様。生憎、戦争で死んでしまったけれど、幸せだったわ。彼と暮らした日々は私の宝物。だからあなたたちも、今は悲しくても、巡り巡って、きつとまた一緒にいられる日が来るって気がするの。本当の絆があればね」

スピン「本当の絆」

離れていくタップ。

暗転

膝を抱えるサニー。

タップが来る。

タップ「サニー」

サニー「タップ・・・アタシ、どうしたらいいの？」

タップ「・・・行きな」

サニー「行くなって言ったって・・・そんな簡単に決められるわけないじゃない」

タップ「怖いのか？」

サニー「だって・・・この場所は、屋根もないけど、あったかいベッドもないけど、私の家なんだよ！みんなが私の家族なんだよ」

タップ「何めそめそしてるのよ。サニーらしくない。いい？私たちの事は気にしないで、思いっきり自分のダンス、踊って見せてよ」

サニー「タップ・・・でもダンデライオンが」

タップ「大丈夫。なんとかなる。私たちが信じられないの？」

サニー「信じてるけど」

タップ「だったら、雑草の底力見せてやりなよ。ダンデライオンの本気のダンスをさ」

サニー「本気のダンス・・・」

タップ「あのハンニバルって人が言っているとおりかもしれない。このままもたれ合って生きていたって、お互いの成長を邪魔するだけ。離れていたって、いつかまた一緒に踊れるって信じていれば夢は続いていく。サニーが頑張る姿を見て、私たちもきつと、もつともつと頑張れると思うんだ」

サニー「・・・わかった、私、やってみる！どこまで出来るか分からないけど、みんなの分もきつと」

タップ「うん」

みんな来る。

M 『本当の絆』

◆STEP 7

エデン。

ハンニバル「おはよう」

エデンメンバー「おはようございます」

ハンニバル「今日は新しいメンバーを紹介する。サニーこっちへ」

サニー「・・・」

デニス「なにか言ったらどうですか？」

サニー「よろしく」

ハンニバル「サニーはダンデライオンというダンスチームにいたんだが、そこをやめて我がエデンのショーに出てくれることになった。うかうかしているとポジションを奪われるぞ。」

お前らしもすっかりやれ」

エデンメンバー「はい・・・」

ハンニバル「デニス。頼んだぞ」

デニス「はい・・・」

立ち去るハンニバル。

デニス「サニー、部屋はこの建物の4階。ミッキーとエバと同じ部屋よ。ミッキー、あとで案内してあげて」

ミッキー「わかりました」

デニス「それから、その男みたいな物言いはすぐ直しなさい。いい？」

サニー「・・・はい」

デニス「それじゃ、今日のスケジュールを確認します。10:00からストーン先生によるリハーサル。12:00より新聞社の取材と新しいショーの宣伝用写真の撮影をします。その後、新しい衣装の採寸と今夜の衣装のフィッティング、夕方からの最終リハーサル終了後、夕食。メイクが済んだらご来店いただいたお客様にご挨拶をお願いします。そしていつもどおり8時からショーをスタートします。終演後もお得意様にご挨拶があります。以上、質問は？ありませんね。それではリハーサルまでしばしご自由に。のちほどまた参ります」

出ていくデニス。

ネイル「ご自由につて、あと10分もないじゃない。ほんと、これじゃ体がもたないわよ」

サニー「あの、アタシはどうすれば？」

ランバダ「やだよ、スケジュールはぎっしりで、にやついた男たちにシャンパンついで、厚化粧のマダムに無理して笑顔つくったり、どうしてダンス以外の仕事がこうもたくさんあるのよ。頭来ちゃう」

テッド「しょうがないだろ。ほんの数分の辛抱だ。御最前あつてのショービジネスさ。な？」

ニキータ「・・・ニキータ？」

ニキータ「どうすればいいかなんて誰も教えてくれないわよ。あなたも今日からプロなんだから、今までみたいないつもりでないで。ここはあなたのいた路上じゃないわ」

テッド「(口笛)」

サニー「アタシが路上で暮らしてたって知ってるんだ」

ニキータ「聞いているわ。ストリートダンスで稼いでたって」

サニー「そのとおり。少しだけどファンも出来て、ダンスを見せて暮らしていた。貧しかったけど、客にお酌なんてしなかったよ」

ランバダ「なんですって!？」

ニキータ「お客にサービスするのもプロのダンサーの仕事よ。何度も足を運んでもらわなければ、商売にならないわ。あなたたちみたいに、人のお情けにすがって路上で踊ってるのとはわけが違うのよ」

サニー「それはそうだろうね。路上とここじゃ天と地ほども違う。だけど、あんたたちそれで楽しい？」

ニキータ「・・・何言ってるのよ、だからプロの仕事って言うのは」

サニー「楽しいかって聞いているの！」

ニキータ「・・・」

サニー「アタシは楽しいから踊る。踊って人を楽しませる。そうじゃなきゃ踊らない。お酌もしないし愛想笑いもしない。あんたたちだってダンスが好きだから踊り始めたんだろ？違うの!？」

ネイルがサニーを平手打ちする。

ネイル「生意気言ってるんじゃないわよ！野良犬が！一度だって自分の価値に値段がついたことあるの!？客から金もらって踊るプレッシャー感じたことあるわけ!？ちよっとオーナーにスカウトされたからって分かったようなこと言ってるんじゃないわよ!いい?ここじゃ、自分目当ての客がいなけりゃ、すぐにでも追い出されるのよ!ファンが出来た?そんなものただの同情じゃない!どうせ戦争孤児を憐れんで、足長おじさん気取ってる人たちでしょ?違う?そこまで偉そうなこと言うなら、あんたのダンスだけで店を満杯にしてもみなさいよ!どうなの?やれるの!？」

サニー「・・・」

ネイル「ふん、威勢がいいのは最初だけ？」

サニー「・・・やってやるよ。自分のダンスだけで店を満杯にしてみせる」

ストーンが来る。

ストーン「何を大きな声出してるの?ウォーミングアップは済んでるんでしょね?あなたたち、喧嘩ならほかでやりなさい。ここは神聖なステージよ。恥ずかしいと思わないの?・・・あなたが新人の?」

サニー「サニーです。宜しくお願いします」

ストーン「私はショーの振付を担当しているストーン。勝気な性格のようだけど、ちゃんと踊れるのよね?ただの無駄吠えなら、容赦しないわよ」

サニー「踊れます、いえ、踊ります!」

ストーン「いいわ、踊ってみて。エバ、曲を出して。サニー、準備いい?」

サニー「はい」

ストーン「始めて」

M 『YOU ARE MY MOONLIGHT』

曲がかかり、一人踊るサニー。

ストーン「いいわよ。ニキータ、引き継いで」

代わってニキータのダンス。

ストーン「いいわよ。ここからデュエット。5, 6, 7, 8！」

二人で踊るサニーとニキータ。

ストーン「ブラボ。あなたたち気が合うんじゃない？5分後に昨日の続きから」

一同「はい」

サニー「ありがとう。おかげで上手く踊れた」

ニキータ「勘違いしないで。私は私のステージを常に完璧にしたいだけ」

出ていくニキータ。

クロックが入ってくる。

クロック「失礼します。切れた電球の交換にきました」

サニー「あ、君。ドアボーイ君」

クロック「え？やあ、君か！よかった、また会えたね」

サニー「よろしくね」

クロック「よろしく？・・・って、もしかしてここで踊るの！？このエデンで君が？」

サニー「うん。なんだか不思議だね？もしかして君がキューピット？」

クロック「そんなわけないよ！実力！君の実力さ。このクラブはショービジネスを目指す人たちのあこがれの場所だ。運や偶然だけで入れるところじゃない。すごいよ。僭越ながら、歓迎いたします」

サニー「やめてよ、そんな大げさな・・・」

ランバダ「クロック、いつからあんたこのオーナーになったの？」

クロック「いや、僕は別に・・・ははははは」

テッド「ただのドアボーイに歓迎されたって、ちっとも嬉しくないよな？なあ、サニー？」

サニー「そんなことないよ。彼とは少し前に」

クロック「君、サニーって言うんだ？僕はクロック。時計のクロック」

サニー「ありがとう、クロック。正直、少し心細かったんだ」

クロック「あとで、仕事が終わったら屋上に遊びにおいでよ。また食料をくすねとくからさ」

サニー「わかった。かならず行く」

ストーンとニキータが戻ってくる。

クロック「じゃあね」

ストーン「それじゃ始めるわよ。サニー、一番後ろについて」

サニー「後・・・ですか？」

ストーン「不満でもあるの？」

テッド「センターじゃないと踊れないのかい？ダンデライオンのサニー様は」

ランバダ「さっさと下がらなさいよ。愚図ね」

サニー「・・・」

ストーン「しっかつかついてきなさい」

サニー「はい」

曲がかかり、踊り始める。

暗転

◆STEP 8

D 『わが美しき日々よ』

素敵な衣装で一人、自由に踊るオードリーの夢。

ナナが来て一緒に踊る。

オードリー「ナナ、見て！私、踊れるの！自由に、自分が思ったように踊れるの！」

ナナ「そうよ。あなたは踊れる。あなたの足が動かないのは、心の問題なのよ。戦争で親を失くしたショックで足が動かなくなっただけ。必ずまた踊れるようになるわ」

オードリー「何を言ってるの？ナナ。私はもうこうして踊って・・・うそ、足が動かない」

ナナ「大丈夫、焦らないで。自分を信じるのよオードリー。あなたはきつとまた踊れるわ」

オードリー「いや、いやよ……踊ってるじゃない！私、こうして自分の足で立ってるじゃない！やめて、いや……いやー！」

暗転

倒れているオードリー。

叫び声を聞いて駆けつける、ナナとスピんとベイブ。

ナナ「オードリー！どうしたの？大丈夫？」

スピン「何があっただい？怪我はない？」

ベイブ「震えてる。オードリー、もう大丈夫よ。私たちがついてる」

オードリー「こわい……私、こわくてしかたがない！」

ナナ「オードリー……」

暗転

◆STEP9

エデンのステージ。

M『YOU ARE MY MOONLIGHT』

喝采に応えるエデンメンバーたち。

暗転

終演後、クロックの屋上の部屋。

サニー「こんばんは。いる？」

クロック「ちよつと待ってて……うーん、取れた！やあ、来たね。初ステージ、お疲れ様」

サニー「ありがとう。でも疲れたー、ははは。何してたの？」

クロック「ああ、これを拾ってたのさ」

サニー「なあにそれ？」

クロック「塀の向こうから来た偵察機が、空からばらまいた新聞みたいなものかな」
サニー「ふーん、何が書いてあるの？」

クロック「えーと、なになに、〃平和を望む者は壁を越えてくるべし！〃それから、〃為政者に騙されるな！〃こっちには、〃神はただひとつ！頭を垂れよ！〃だって」

サニー「難しくよくわからないや」

クロック「僕も。実はね、僕は塀の向こうの生まれなんだ」

サニー「そうなの？びっくり。でも、どうしてこっちにいるの？」

クロック「さらわれたんだ。こっちの兵隊に」

サニー「ひどいね」

クロック「僕は何も覚えちゃいないけどね。だけど、どうして人間は争うことをやめられないんだらうなって、いつも考えちゃうよ。ほら見てごらん」

サニー「なにを？」

クロック「塀の向こうに、赤い屋根の塔があるだろう？鉛筆みたいにまっすぐ伸びた大きな時計台」

サニー「・・・あ、見えた見えた！ずいぶん高い塔だね」

クロック「僕はあの塔の一番上にいるやつと友達なんだ」

サニー「友達？いつからどうやって？」

クロック「ふふん。こっちから見えるってことは向こうからも見えるってことだろう？」

サニー「そうだね」

クロック「ある夜、なんとなく塀の向こうを眺めてたら、光ったんだ」

サニー「光った？」

クロック「ああ。最初は何かが反射したのかなって思ったんだけど、何度も繰り返し光ってるんだ。しかもこっちに向けてね」

サニー「なんでなんで？」

クロック「分からないけど、僕もこの電灯を使って、ために光を送ってみたのさ」

サニー「どうなったの？」

クロック「すぐに、光が返って来た。まるで僕の光に返事をするみたいにね」

サニー「信じられない！」

クロック「それから何度も、僕たちは光の交信してる。最初はでたらめに灯りをつけたり消したりしてたんだけど、今じゃ〃月が綺麗だね〃とか〃明日は晴れかな？〃とか、話をするつもりで光を送るんだ。そうすると、向こうからも返事みたいな光が返ってくるようになった。たぶん言葉の意味は正確じゃないんだらうけど、なんだか僕は友達と話せたみたいで、少し、嬉しんだ」

サニー「クロックの故郷だもんね」

クロック「ああ。僕の故郷の、見たことも、会ったことも友達さ」

サニー「いつか会えたらいいね」
クロック「そうだね」

ミッキーとエバが来る。

ミッキー「クロック！何してるの？」

クロック「やあ、ミッキー。エバも」

エバ「まあ、サニー！」

ミッキー「サニー、今夜のダンス、素敵だったわ！」

エバ「ほんと！一緒に踊れて光栄よ」

サニー「ありがとう。色々教えてね。あ、またニキータに怒られちゃうかな」

ミッキー「かもね（笑）。でも、一緒に頑張ろう、サニー」

サニー「うん」

エバ「クロック、なにか食べ物ある？」

クロック「OK、今日とはびきり上等なスペアリブが手に入ったよ」

M 『We Are Hungry!』

◆STEP10

エデン前。ローラ婦人に連れられて、エデンのショーに来たダンデライオンたち。

ローラ「さあ、ここがショークラブ「エデン」よ。立派でしょ？」

オードリー「なんだか緊張するわ」

スピン「半年ぶりかあ、サニーのやつ、僕らの事覚えてるかな」

ナナ「馬鹿ね。忘れるわけじゃないじゃない。スピンたらおかし」

スピン「だってさ、新しい場所で新しい仲間もいるだろうし、すごいステージで毎晩踊ってたら、忙しくて僕達の事を思い出すことも、あまりなくなっちゃうのかなって」

ベイブ「何をいじけたこと言ってるの？サニーはそんな人じゃないわ」

タップ「そうよ。じゃなきや、今夜のショーに招待してくれるはずないじゃない。ねえ？

ローラ婦人」

ローラ「タップの言う通り。サニーはいつまでたっても、どこにいてもダンデライオンの仲間よ」

スピン「そうだね。馬鹿だな、僕は」

ローラ「さあさ、そろそろ時間よ。みんなでしっかり応援しましょ」

クロックが出てくる。

クロック「いらっしやいませ！開店と同時にお越しいただけるなんて、今夜もきつと素晴らしいショーになることでしょう。さあ、どうぞ。中でチケットを拝見いたしますよ」

タップ「あなた、もしかしてドアボーイ君？」

クロック「・・・はい。僕は当ショークラブ「エデン」の看板ドアボーイ、クロックと申します。どうぞお見知りおきを！ですが、どこかでお会いしましたか？」

タップ「いいえ。サニーは元気？」

クロック「はい。元気ですが・・・あ！もしかしてダンデライオンの！？」

スピン「イエース！僕たちが路上のダンスチーム「ダンデライオン」でござい！」

クロック「サニーからいつも聞いてます！いやー、感激だなあ！」

オードリー「サニーには会えるのかしら？」

クロック「終演後なら。開演前はお得意様以外とはご挨拶できない規則なんです。あ、ショーが終わったらここで待っていてください。僕がサニーを連れてきますよ」

タップ「ありがとう。サニーの邪魔にならないようなら、お願いしていい？」

クロック「もちろん！さ、ご案内しましょう」

クラウンが急いで来る。

クラウン「間に合った！やあ、クロック、みんな準備OKかな？」

クロック「はい。先ほどからオーナーもお待ちかねです」

クラウン「いやあ、まずいな。待たせてしまったか・・・とにかく急ごう」

ハンニバルが出て来る。

ハンニバル「クロック、新聞記者のクラウンはまだ来ないか？」

クラウン「ハンニバルさん、すみません！前の取材が長びいてしまつて、今着きました」

ハンニバル「私の仕事より大事な取材とは、さぞやたいへんな取材だったんだろうな。今日はニキータの誕生日だから、バースデイショーの特別プログラムなんだ。明日の新聞の娛樂欄に特集を組むためにリハーサルから取材するように頼んでいただろう・・・君たちは」

タップ「お久しぶりです」

ハンニバル「ああ。どうしたんだ？今日は何の用だい？彼女なら今からショーが始まるんで忙しいんだが」

スピン「その彼女から、今日のショーに招待されてね。な？」

ベイブ「ええ、そうよ。つまり私たちはお客様」
ハンニバル「なるほど。これは大変失礼いたしました。どうぞ存分にショーをお楽しみください」

タツブ「ありがとうございます。行こう」

店に入っていくダンデライオン。

ハンニバル「何をしてる。早く仕事を始めろ」

クラウン「はい。失礼します」

暗転

D 『エデン』

テッド「みなさん、ようこそ！シヨークラブ #エデン #へ」

ランバダ「今日は皆さんもご存じのとおり、エデンのスター、ニキータの誕生日でございます！」

テッド「メンバー、スタッフ一同、いつも以上に、心を込めて今日のショーをお送りしたいと思います。どうぞ、最後まで心ゆくまでお楽しみください！」

ランバダ「それでは次の曲は、ニキータの美しさを象徴したかのような曲をお送りしましょう！ #YOU ARE MY MOONLIGHT」

M 『YOU ARE MY MOONLIGHT』

途中、ニキータが足をくじき倒れる。

駆け寄るメンバー。

暗転

エデンの楽屋に集まったエデンメンバーと経営陣。そして記者のクラウン。

ニキータ「大丈夫です。私、踊れます！今夜一晩ゆっくり休めば、必ず」

ハンニバル「その足じゃ無理だ」

ニキータ「でも！」

ハンニバル「誕生日だからと用意したスペシャルショーがめちゃくちゃだ。お得意様たち

も口々には気にするなと言っていたが、おそらくこのままでは次のショーにはお越しにならないだろう」

ニキータ「わたし・・・踊れます・・・」

ハンニバル「サニー。明日から君がニキータの代わりに務める」

ニキータ「！」

サニー「私ですか？」

ハンニバル「そうだ」

テッド「本気かよ」

ハンニバル「君がニキータの分もお客様の期待に応えろ。ショーの段取りは全てわかってるだろう？」

サニー「それは」

ハンニバル「だったら何も躊躇することはない。あとは覚悟の問題だ。エデンの看板をよって立つという覚悟がな」

クラウン「あの、特集の方は」

ハンニバル「決まってるだろう。中止だ」

出ていくハンニバル。

クラウン「まいったなあ。今から穴埋め記事考えなくちゃ・・・」

想い雰囲気の楽屋。

デニス「(ため息) とりあえずまた明日考えましよう」

ネイル「やれるの？」

サニー「・・・え？」

ネイル「ニキータの代わりにあんたにやれるのかって聞いているの？」

サニー「いきなり言われたって」

ニキータ「出てって・・・」

ストーン「オーナーの指示ならやるしかないわね。一人少ないからフォーメーションを変更して、ソロの部分を」

ニキータ「出て行って！」

一同「・・・」

デニス「行きましょ」

みんな部屋を出ていく。

顔をうずめ嗚咽するニキータ。

外で客の見送りをしているクロック。

店から出て来るダンデライオンたち。

クロック「あ、みなさん。今日はこんなことになってしまつて、なんとお詫びしたらいいのか」

ローラ「あなたのせいじゃないわ。気にしないで」

ベイブ「だけど、サニー素敵だったわね」

ナナ「そうね。少し緊張してるみたいだっけけど、よくやつてた」

スピン「でもどうなっちゃうんだろう？あのニキータって人、このショーのメインダンサーなんだろう？」

クロック「はい・・・」

ベイブ「サニー！」

サニーが出て来て駆け寄るダンデライオン。

スピン「すごかったよ、サニー！照明なんてピッカピッカ光っちゃつてさ」

タップ「サニー、お疲れさま。よかったよ。やっぱり私たちのサニーね」

ローラ「ほんとうに、誇らしかったわ。大声で叫びそうになったわよ。見て、あれが私たちのダンデライオンのサニーよ！つてね」

サニー「オードリー、ありがとう。ちゃんと見えた？」

オードリー「うん、見えたわ。クロックがとてもいい席を用意してくれたの」

サニー「ありがとう、クロック」

クロック「へへへ」

タップ「それじゃ、また明日からもがんばつて。今日は招待してくれてありがとう。だけど、無理しないで。お金は大事よ。今度は私たち、自分たちの稼いだお金で見に来るから」

スピン「でもそれじゃ、いつになるんだろうね？」

オードリー「何言ってるの。頑張りましょうよ。サニーがこんなに頑張ってるんだから」

ベイブ「そうよ。スピンはだんだん意気地が無くなっていくわね」

スピン「そんなこと・・・あるかな？」

一同、笑。

タップ「じゃあね、おやすみ」

ベイブ「バイバイ、サニー」

サニー「バイバイ、ベイブ。またね」

スピン「負けんなよ」

サニー「あんたこそね」

オードリー「……………」

サニー「オードリー？」

オードリー「大好きよ、サニー」

抱きしめあうサニーとオードリー。

帰っていくダンデライオン。

クロック「素敵な仲間だね」

サニー「そう。最高の仲間だよ」

クロック「さあ、店を閉めなきゃ……………どうしたの？サニー」

サニー「クロック……………アタシ……………オーナーが明日からニキータの代わりにしろって」

クロック「本当！？サニーがニキータの代わりにメインで踊るの？すごいじゃないか！ニキータはあんなことになってかわいそうだけど、チャンスだよサニー！これはすごいチャンスだよ！」

サニー「わかってるんだけど……………大丈夫かな？アタシなんかで」

クロック「何言ってるんだ？みんなと約束してたじゃないか！頑張るって」

サニー「クロック」

クロック「最高の仲間がついてるんだ。失敗を恐れて縮こまってたって何も変わらないよ。もう一度、みんなと一緒に踊るんじゃないのかい！？そのために頑張ってるんじゃないのかい！？」

サニー「そうだった。忘れちゃいけないんだ……………アタシには夢があるってこと、忘れちゃいけないかったんだ！」

M 「Don't Forget My Dream (スローバージョン)」 歌

◆STEP 11

エデンの楽屋。

ショーの準備をしているネイル以外のメンバー。

サニー「おかしいな……………ダンスシューズがない……………」

ミッキー「どうしたの？サニー」

サニー「シューズがないの・・・たしかにここに入れておいたんだけど」

エバ「もう一度よく探そう。わたしも手伝う」

サニー「ありがとう、エバ」

あらためて探し始めるサニーたち。

テッド「ダンサーにとって、シューズは命の次に大事だって教わったなあ」

ランバダ「人気が出てきて調子に乗ってるから、シューズを失くしたりするんじゃない？」

テッド「所詮、ニキータの代わりなんて務まるわけがないんだよ」

ランバダ「どうしたって生まれの貧しさが、ダンスに出ちゃうしね」

テッド「言ってる(笑)」

ランバダ「あら？聞こえちゃった？ごめんなさい、根が正直だからつい(笑)」

サニー「まさかあんたたち」

ランバダ「まさかってなによ？何が言いたいの？」

サニー「いや・・・いい」

テッド「おいおい、まさか俺たちがお前の靴をどうこうしたなんて思っていないよな？」

サニー「そうじゃないけど・・・こっただけ探して見つからないのはおかしいし」

ランバダ「ちよつと、あんた！自分の不注意で靴を失くしておきながら、人を疑うってどういう見よ！？責任とれるんでしょうね？靴が出てきたらあんたどうやって詫びいれるつもり？」

テッド「出てこない気はするけどね」

大笑いするテッドとランバダ。

そこにネイルが、ずぶ濡れで泥のついたサニーの靴を持って入ってくる。

エバ「あ、それ」

ネイル「これ、あんたのシューズじゃないの？」

サニー「そう！・・・どうして？」

ネイル「裏のドブに捨ててあったわよ。ゴミに引っかかって止まってたから拾ってきたのよ。まだ履けるじゃない？どういいうつもりよ」

ミッキー「違うの、ネイル！今、その靴を探していたの」

ネイル「なんで？」

エバ「サニーはちゃんとカバンにしまったのに、いつの間にか靴がなくなっちゃって・・・」
ネイル「・・・そういうことか」

テッド「ちよつとトイレに・・・行くぞ」

ランバダ「うん・・・」

ネイル「戦いよ」

サニー「え？」

ネイル「たしかにこの世界は戦い。誰もが自分が一番になろうとしている。他人を蹴落とすでもトップの座を手に入れようと必死にもがいている。だから、靴がなくなったのは油断して隙を見せたあんたの落ち度よ」

サニー「分かってる」

ネイル「だけど、今はニキータが怪我をして、私たちだけでショーを成功させなくちゃいけない時よ。くだらない足の引っ張り合いなんかしてたら、結局、自分で自分の首を絞めることになる。ニキータが復帰するまで、絶対に人気を落とすわけにはいかないのよ。違う？テッド。ランバダ」

テッド「・・・そのとおりだな」

ランバダ「あなたの言うとおりだわ。ネイル」

自分のカバンから別のダンスシューズを取り出すネイル。

ネイル「これ使いなさい」

サニー「・・・いいの？」

ネイル「私はニキータを尊敬してる。彼女の口癖よ。“私は私のステージを完璧にしたいだけ”。あなたたちもそう思わない？」

暗転

D 『エデン』

テッド「みなさん、ようこそ！ショークラブ「エデン」へ」

ランバダ「みなさまの応援のお蔭で、新しいエデンのスターが誕生致しました！改めて紹介いたします！当店、人気ナンバーワンダンサー！サニー！」

盛大な声援。

テッド「それではこの後も、メンバー、スタッフ一同、いつも以上に、心を込めて今日のショーをお送りしたいと思います。どうぞ、最後まで心ゆくまでお楽しみください！」

ランバダ「それでは次の曲は、サニーの輝きを象徴したかのような曲をお送りしましょう！

// YOU ARE MY MOONLIGHT //

M 『YOU ARE MY MOONLIGHT』

◆STEP 11

クロックの屋上。

クロック「へえ、そんなことがあったんだね。どうりで最近の君たちのダンス、気が合っていると思ったよ」

サニー「困難と一緒に乗り越えると、気持ちが一つになるんだなってこと、すごい勉強になったな」

クロック「そうだね。何もなければ人は変わらないのかもしれないね。壁があるから成長できる。平坦な道じゃ退屈するばかりで飽きちゃうのかも。贅沢だな、人間って」

サニー「ほんとだね」

笑い合う二人。ふと塀の方を見るクロック。

クロック「お、通信のようだな・・・おかしいな？」

サニー「なにが？」

クロック「ほら、見て。塀の向こうの塔」

サニー「どうかしたの？」

クロック「光が、すごくあわただしく点滅してる。あんなのはじめてだ。まるでなんだか、あわてるみたいだ。どうしたんだろう？何か緊急で知らせたい事でもあるのかな？」

サニー「緊急って？」

クロック「わからないよ。でもなんだか胸騒ぎがする。そうだクロックさんに聞いてみよう。新聞記者なら何か知ってるかもしれない」

サニー「そうだね。行ってみよう！」

突然響きわたる、砲撃の着弾音と爆発音。

サニー「うわー！」

クロック「サニー！大丈夫か！？」

サニー「なにこれ？クロック、何が起きたの！？」

クロック「・・・戦争が再開したんだ！」

サニー「うそ！？」

クロック「あの光の点滅は、僕たちに逃げろって言ってたんだ。きっと、戦争の再開を教えるためのものだったんだ！」

サニー「どうしよう、クロック!?」

クロック「ここにいちや危ない。とにかく下へ降りよう」

サニー「うん」

屋上を後にする二人。

激しい砲撃。

ランバダ、テッド、ミッキー、エバが手を貸し合いながら降りてくる。

半狂乱のストーンとデニスが降りてくる。

逃げるのを拒むハンニバルを引っ張って降りてくるクラウン。

クロックとサニーが降りて来る。

ハンニバル「くそっ! やめないか! 私のショッククラブだ! やめろと言ったらやめないか! 私の店だぞ! このハンニバル・ホプキンスの店なのだぞ! …やめろー!」

クラウン「安全な場所へ逃げましょう! 君たちも早く!」

ハンニバルを引きずるように連れて行くクラウン。

ついて行くストーンとデニス。

サニー「ニキータがない…」

クロック「…本当だ」

ミッキー「足が痛くて動けないのかしら…」

テッド「…まだ部屋の中ってことか」

ランバダ「どうしよう…」

建物の中に戻っていくサニー。

クロック「サニー! あぶない! だめだ、戻ってこい! いつ崩れるか分からないぞ! …くそ!」

サニーを追うクロック。

エバ「クロック！」

クロック「心配するな。必ず二人とも連れてくる。先に行け！早く！」

顔を見合わせて、うなずき合い逃げていくエデンメンバーたち。

更に激しさを増す砲撃の音。

暗転

ニキータの部屋。

飛び込んでくるサニー。

突っ伏したままのニキータ。

サニー「ニキータ！大丈夫！？ニキータ、返事をして！しっかり！」

クロックが来る。

クロック「サニー！」

サニー「クロック！こっち！」

クロック「よし、連れていこう。君はそっちを持って」

ニキータ「やめて！ほっといて！」

クロック「ニキータ・・・何を言ってるんだよ！扉の向こうの連中が攻撃を再開したんだ！また戦争が始まっちゃったんだよ！」

ニキータ「いいの・・・このままここにいる」

サニー「だめだよ、ニキータ！早くに逃げなきゃ！こんなところで死んでもいいの！？また一緒に踊ろうよ！さ、早く！」

ニキータ「ほっといてって言ってるでしょ！私なんかもうどうなったっていいのよ！だいたい、調子のいいこと言わないでよ・・・一緒に踊ろうなんて、思ってもやしないくせに！」

サニー「ニキータ・・・」

ニキータ「いい気味でしょ？ライバルを蹴落として、トップの座についたんだから。私はもう終わりよ！復帰したってお客はみんなあなたをターゲットに店に来てる。私のことなんてみんなとっくに忘れているのよ！」

ニキータを平手打ちするサニー。

クロック「サニー・・・」

サニー「ちっともいい気味なんかじゃない。だってアタシの今のポジション、自分でもぎ取ったんじゃないもの。あなたが勝手に怪我をして、アタシは代役を命ぜられただけ。だからこれっぽちも嬉しくなんてない。でもさ、あなたには悪いけど、今回の事でエデンのメンバー、ひとつになったよ。あなたがいない穴をどうやって埋めるか、みんな必死に考えた。ネイルが言ってた。あなたが帰ってくるまで、絶対にエデンの人気を落とさちゃ駄目だって」

ニキータ「・・・え？」

サニー「そんな仲間を裏切れるの？待ってくれるお客さんだってたくさんいるはずだよ。ニキータ、いつも言ってるじゃない。＼私は私のステージを完璧にしたいだけ＼って。それ聞いて私も、今自分にできることにベストを尽くそうって決めたんだ。だからあなたも、ベストを尽くしてよ。完全復活したあなたと、本気のトップ争いがしたい。どう？受けて立つ？」

ニキータ「サニー・・・上等じゃない。後悔させてあげるから！」

クロック「それじゃ、とりあえず、逃げようぜ！」

ニキータに手を貸して逃げるサニーとクロック。

暗転

◆STEP12

長い砲撃がやっとおわり、エデンの前に戻ってきたエデンメンバー。

崩壊したエデンを見て慟哭するハンニバル。

ハンニバル「わたしの店が・・・わたしのエデンが・・・嘘だ、こんなことがあるはずがない・・・うあー!!」

そこにダンデライオンとローラ婦人が来る。

タップ「サニー！」

サニー「タップ！みんな！」

駆け寄り無事を確認し合うダンデライオン。

サニー「みんな無事で良かった」

ナナ「マンホールから地下道に逃げ込んだの」

ローラ「突然攻撃してくるなんて・・・」

クラウン「それが戦争ってもんですよ」

オードリー「なんのためにこんなこと続けるんだろう？誰一人、幸せになってないのに」

ローラ「本当ね・・・」

スピン「店・・・なくなっちゃったね」

ベイブ「あれ？」

スピン「どうした？ベイブ」

ベイブ「見て。こんなところに、タンポポ」

ローラ「まあ、あの爆撃にも耐えて、咲き続けてるなんて」

立ち上がろうとするオードリー。

スピン「オードリー、どうしたんだい、急に・・・ほら、僕につかまって」

オードリー「手をださないで！自分で立てるわ」

ナナ「オードリー・・・頑張って」

立ち上がるオードリー。

オードリー「立てた！自分の足で立てたわ！」

サニー「オードリー！」

オードリーに駆け寄るダンデライオン。

M 『Believe』

立ち上がるハンニバル。

結束を固めるエデンメンバーたち。

サニーを抱きしめるクロック。

みんな、明日を信じて歌い続ける。

暗転

M 『奇跡のダンデライオン』